

## 「子どものボランティア活動活性化のための研究会」のまとめ

平成27年3月24日

特定非営利活動法人さわやか青少年センター  
子どものボランティア活動活性化のための研究会

早稲田大学文学学術院教授 増山 均  
埼玉純真短期大学講師 齋藤 史夫  
さわやか青少年センター理事長 有馬 正史

### はじめに一平成26年度の研究の内容

平成25年度の「子どものボランティア活動活性化のための研究会」の中間報告（3頁～7頁）をふまえて、引き続き次の課題を立てて26年度の研究を進めた。

1. 昨年度に引き続き、佐賀県神埼市での新成人アンケートを行い、その内容を「ボランティアパスポート事業におけるふれあいボランティア活動の継続性の意義についての調査」としてまとめた。
2. ボランティアパスポートを活用した取り組みを継続的に行っている小中学校2校の教員へのヒアリング調査（1頁～2頁）をおこなった。
3. 「ボランティア活動についての教員の意識調査」（19頁～24頁）を行い、その内容を分析した。

以下、上記課題について順次報告する。

**1について**平成26年度ふれあいボランティアパスポート事業におけるふれあいボランティア活動の継続性の意義についての調査（8頁～18頁）

#### **2について**

##### 「FVPを活用した取り組みを展開してきた学校教員へのヒアリング調査結果」

1. ヒアリングを通して明らかにされたことは次の諸点である
  - ① 担当の教員は、苦勞しながらも良くがんばっている。
  - ② しかし、教職員の間で、共通理解と意義の確認がなされておらず、担当者任せとなり、FVP活動の取り組み開始時の位置づけや意義づけが継承されていないのではないかと思える。
  - ③ そもそも子ども・生徒にとっての「ボランティア活動とは何か」「ボランティア活動がなぜ必要か」について、深い検討がされておらず、従来から取り組まれてきたので、続けているということになっていないだろうか。

- ④ 学校が認識している「ボランティア活動」以外にも、すでに取り組みられている子どもたちの活動が、学校の内外にあるが、それらの活動はボランティア活動として、教師の視野に入っていないのではないか。（「ボランティア活動」の認識に画一化・硬直化がみられる）「学校が認識している以外の子どもたちの活動」とは、たとえば、町内で取り組みられている祭りや行事などで活躍する子どもたちの姿である。
- 中学校であれば、「N 神社」のお祭りの模擬店など（子ども広場、ゲーム、お菓子配り・・・）などがある。
- 小学校であれば、感謝集会での地域の人たちへのお礼の手紙書きや S 神社での太鼓サークル、月曜日に開催する子どもとお年寄りの交流の場などがある。
- ⑤ 特に、地域の取り組みとのかかわりなどのなかに、子ども自身が主体的に取り組んでいる活動がある。地域の商店街に役立っている活動などもあり、「ボランティア」の本来の意味である「人の役に立つ活動」であり、それを評価することが大切ではないか。
- ⑥ 人に親切にしたとき、「気持ち良かった」ということの中身（ボランティアの活動の中身として認識すること、価値づけてあげることが大切であり、子どもの成長につながるきっかけになる）を、きめ細かに評価する視点が必要ではないか。
- ⑦ 子どもたちの、生活の中の小さな取り組みを、①子ども同士の間で、②教師間で、③親をはじめ、地域の人々との間で、評価し合っていく視点をひろげていくことが必要ではないか。

2. 以上のヒアリングの内容を踏まえると、「子どものボランティア活動の活性化」のためには、何よりもボランティア活動にかかわる教員自身の意識が重要であり、その点を調べるために、「ボランティア活動にかかわる教員の意識を調査」を行うことが必要である。（平成 26 年度調査実施 19 頁より）

## 平成 25 年度「子どものボランティア活動活性化のための研究会」の中間報告

I. の平成 25 年度佐賀県神埼市の新成人ボランティア活動アンケート調査は、平成 26 年度佐賀県神埼市の新成人ボランティア活動アンケート調査に組み込む

### II. 子ども期の「ボランティア活動」への視点

増山 均（早稲田大学文学学術院教授）

#### 1. ボランティア作文を通して考える

「ボランティアパスポート」を活用した取り組みが各地で展開され、「ボランティア感想文」がたくさん寄せられている。さわやか青少年センターでは、それらの感想文のなかからボランティア活動の精神と意義を的確に表現しているものを選んで表彰し、『ふれあいボランティア活動感想文集』を発刊しているが、表彰されなかった作文も含めて、寄せられた多数の感想文は貴重な資料である。それらを素材にして、「ボランティアパスポート」を活用した子どものボランティア活動の意義を考える上での課題を検討してみたい。

次に紹介する 3 つの作文は、いずれも選外になった作文であるが、検討の素材として紹介する。  
(抜粋・引用。下線は、検討の過程で注目した部分である)

これらの作文につづられた子どものたちの声の中から、「ボランティア活動」を通じて得た子どもたちの成長につながる「気づき」のポイントは何かを拾い出すことから始めよう。

##### 小学校低学年

わたしが、今年おこなったボランティア活動は、クリーン作せん、アルミカン、修学旅行のゴミひろい、スリッパならべ、米あらいです。修学旅行のゴミひろいでは、いっしょうけんめいがんばりました。

特にならばったことは、クリーン作せんです。ボランティアをすると、心がすっきりした気持ちになります。

**ボランティアパスポート**は、やっと三まい目になりました。

ボランティア活動を通して自分がせい長したことは、すすんでやることです。

これからやっといこうと思っていることは、重たい物をもって、きつそうにしている人を見かけたら、はずかしがらずに声をかけようと思います。

##### 小学校高学年

私はボランティアをするたびに気持ちが良くなります。だれかにいわれてやった時と自分から進んでやった時の気持ちは全ぜんちがいます。私の今年のボランティアは心を育ててくれたボランティアになりました。

今年も 7 月に**ボランティアパスポート**がわたされ、去年よりもレベルが上がったボランティアをすると決めて生活しました。けれどまずできることから始めました。地域の落ちていたゴミを拾う、お年寄りのやさしくするなどをしました。どの事をやっても必ず気持ちが良くなりました。下級生に優しくしていると、先生が「さすが高学年！！」と声をかけてくれた時、とてもうれしくなりました。小さなボランティアをたくさんしていると去年よりも気持ちが良くなる事がおおくなってい

ました。私はレベルが上がったボランティアをもうしているのかなと思いました。それから少したつと家の人や先生方に「手伝って」などいわてやる事が多くなってしまいました。

お母さんに、「近所の人がAちゃん自分から進んでゴミ拾ったりしていてすごいねっていわれたよ。」と言われて、また自分から進んでやろうと決めました。人の気持ちを考えて泣いていた下級生に話しかけたり、家の人や先生の手伝いをしたりしました。

ボランティアは自分も心が気持ちよくなって、相手も心が気持ちが良くなる事だとわかりました。ボランティアは、する人の心を育ててくれる物だとわかりました。これからもできる事をして心を育てていきたいと思います。

#### 小学校高学年

私は、2ヶ月に1回の地区の資源回収に参加しています。資源回収では、カン・1升瓶・新聞紙・雑誌などの回収を積極的に行っています。子ども会が中心になり、リヤカーなどを利用して、皆の自宅前にだしてある資源を回収します。地域の方々にも協力していただき、毎回たくさん集まります。

1年生の時は、資源回収って、なんであるのかな。面倒だな。と思っていました。でも4年生、5年生の総合で学習した、環境問題では、オゾン層の破かい・砂漠化・酸性雨などが問題になっている事が分かり、そしてゴミも問題になっているという事も分かりました。そのことから、最近、積極的に資源回収に参加するようになりました。

これからは、ただなんとなく資源回収に参加するだけでなく、地球の環境も考えて、積極的に資源回収やボランティアに参加したいと思います。

地域全体が、ものをすてるのではなく、再利用するいしきが高くなっていると思います。子供会の時に、その大切さを学ぶことは、これから、成人になっていくので、とてもいい事だと思います。来年も地域一丸となってがんばりたいと思います。

学校の周りには、自然がたくさんあり、夏には蛍が飛んで、リスがいつも校庭に遊びに来ます。この自然が豊かな環境を保ちたいです。

そのために、私は、道に落ちているゴミを拾ったり、電気をこまめに消す、使わない時は水道の水は出さないなどを心がけていきたいです、日常の小さなことでも、私ができるのであれば進んで活動したいです。

#### 子どもたちの「気づき」のポイントは何か

##### ① 「ところが、気持ちが良くなる」ということ

「ありがとう」と声をかけられたときの「うれしさ」。やりとげたあとの「すがすがしさ」。「ところがスッキリした」など清掃活動に参加してキレイにしたのは、地域の環境であると同時に、自分のところと気持ちであったことを発見している。どの感想文も、「ボランティア活動」に取り組んで感じた自分の心の動き、気持ちの変化を、しっかりと見つめていることが記されている。

##### ② 「自分からすすんで取り組む」ということ

たとえ「ボランティアパスポート」が取り組みのキッカケだったとしても、先生や親に誘わ

れて取り組みに参加したとしても、その中で「自分から進んで取り組む気持ちが大切であること」への“気づき”にも注目したい。「自分で進んでやったときの気持ちはぜんぜん違う」ことを知り、自発性・主体性が重要であることを発見している。

### ③ 「活動を通して考える」こと、「学習と結びつける」こと

実際に活動してみると、「感じる」ととともにいろいろ考える。特に高学年の作文に現れている「どうして、ごみを捨てるのかな」、「だれが、こんなに捨てるのかな」、「どうしたら改善できるだろうか」「自分が大人になったら、このようにしたい」と。地に足をつけて考える姿勢、思考の発展を重視したい。「こころ」の問題だけでなく、体験を通して感じたこと・考えたことを「学習に結びつける」ことが大切である。ゴミ問題から、地球環境の破壊問題、地球の資源問題などを、学校のカリキュラムを通じて学ぶことにより、ボランティア活動の意義の深い理解へとつながる。その点でも、学校教育との連携が不可欠であろう。

## 2. 「あてにされる」関係の創造—「出番と役割と立場をつくる」こと

人間の生きがいにとって重要な要素は、日々の人間関係の中で「あてにされる」ということである。「あてにされる」ということは、子どもの育ちにとっても、きわめて重要な要素である。

人間関係の中で、「あてにされる」ということは、そこに自分の出番と役割があり、自分の立場があるということであり、立場に付随した責任があるということである。どんなに小さくとも、人間は「役割」を持ち、「出番」が与えられ、「責任」を果たすことにより、「立場」を獲得し成長していく。家庭でも、学校でも、職場でも、地域社会でも、「あてにする—あてにされる」という関係のなかで、自分は「役に立っている」「必要とされている」と実感できることで、自尊感情が強まっていく。

今日の教育や子育てで失われている視点は、子どもたちは守られ、サービスを与えられる存在ではあっても、「あてにされる」存在になっていないということである。子どもの生活のなかに出番と役割が失われ、家庭と地域社会の中で「子どもたちは失業している」のである。

かつて第一次産業を基礎として村共同体が機能していた時代は、「子守り」という仕事があり、「手伝い」という家事労働・生産労働があった。また、村の祭りや伝統芸能の中に、さまざまな形で子どもたちの出番と役割が組み込まれ、子どもたちは当てにされていた。家庭を超えた地域社会の中に、他に変えがたい役割と出番があり、子どもたちは「あてにされる」存在だったのである。

幼い時から、役割を果たす年長の子を見てまねをし、始めは小さな役割から、次第に少しずつ大きな役割を獲得し、それをやり遂げていくことを通じて、子どもたちは共同体の一員として成長していった。

いまなぜ地域社会の中での「ボランティア活動」が必要なのかといえば、地域社会の中に子どもたちの役割と出番があることを見出し、子どもたちの知恵と力を「あてにする」人間関係を生み出すためである。

### 3. 子どもにとって「ボランティア」とは

#### ① 「ボランティア活動」の中身の検討が求められている

学童・生徒のボランティア活動には、13分野（下記）あると指摘されているが、これらの分類は非常に曖昧である。

【1 あつめる・つる（収集・募金活動）、2 つくる（製作・創作活動）、3 ふれあう（友愛・交流活動）、4 てつだう（サービス活動）、5 ひろめる（啓発・啓もう活動）、6 しらべる（調査・研究活動）、7 ととのえる（地域環境整備活動）、8 まなぶ（学習活動）、9 つたえる（文化伝承活動）、10 たのしむ（てい幾・レクリエーション活動）、11 まもる・ふせぐ（生活改善・保健衛生・医療看護の活動）、12 なかよくする（国際協力・国際理解活動）、13 まねく（学校行事への招待活動）】

子どもたちの作文を見ていると、取り組んだ「ボランティア活動」の中身もさまざまであることがわかる。

- ①道路に捨てられた空き缶やゴミ拾い、地域の清掃活動。学校や神社・お寺の草取り、落ち葉の清掃など。
- ②保育所の子どもと遊ぶ活動。高齢者施設のお年寄りをはげます活動など。
- ③書室の破損した本を修理するなど。

子どもたちが「ボランティア活動として意識しているのは、だいたい①②③のような活動であるが、さらには、自分も食べたり使用することになる家庭や合宿での「米あらい」、「スリッパならべ」や、中には、家の庭の草取りや、部屋の掃除、さらには自分の部屋の掃除・片付けをも「ボランティア活動」と捉えて、作文に書いている子どもも数多く見られる。

「ボランティア活動」の本質は、①自分の意思で行う＜自発性＞と、②自分や身内のためだけにするのではない＜社会性・公益性＞にあるといわれるが、本来、自分の部屋の掃除などは、自分でやって当然なことがらであり、それを「ボランティア活動」と捉えること自体、「ボランティア」への間違った認識を広げていることになる。

「ボランティアパスポート」を活用して、子どもたちを「ボランティア活動」に誘う場合、少なくとも大人の側は、「そもそも『ボランティア』とは何か」ということの本質を把握し、ボランティア活動の中身を明確にしておくことが必要であろう。特に、小学校低学年の場合は、子ども自身の体験と理解がまだ狭いので、慎重を要する。したがって、少なくとも小学校3年生くらいまでの、年少の子どもたちにとっては、むしろ安易に「ボランティア」という言葉を広げないほうが良いのではないかとと思われる。

#### ② 「ボランティア」という言葉の理解をめぐって

子どもにとって「ボランティア活動」が重要である、ということが自明のように語られてい

るけれども、そもそも「ボランティア」という言葉で取り込まれている内容を、「ボランティア」という言葉で表現した方がいいのかどうかを再検討する必要があるのではないか。

子どもたちが成長・発達していく上での生活・活動の全体を考えた場合、年齢が若い段階から次第に上に行くに従って、その生活・活動の内容は拡大・深化していく。睡眠・食事・排泄などの「基本的生活」活動を身につけることから出発して、「遊び」「学習」「仕事」「表現」活動などその内容が豊かになり、さらに「社会的生活」を営むための資質を身につけて行く。

特に「社会的生活」を営むために必要な資質を考えると、その中に①「話し合う」、②「集い会う」、③「人の役に立つ」活動が含まれる。

「ボランティア」活動という用語で表現してきたことは、じつは人間が「社会的生活」を営むために必要な資質としての③「人の役に立つ」活動のことである。ことさらに「ボランティア」という言葉を使わなくとも、「人の役に立つ活動」に取り組むという姿勢は人間社会で生きていくうえで、常に必要なことであり、不可欠なことである。

「人の役に立つ」ための活動は、本来自らの自発的意思によって行われるものだが、たとえ外から求められた場合でも、つねに①「話し合う」、②「集い会う」という社会的生活を営むために必要な資質とセットで追求されるべき課題であろう。にもかかわらず、「人の役に立つ」側面だけが切り離されて強調されると、＜他人のための活動に参加する＞＜困った人のために奉仕する＞という他律的・慈善的意識に転化する可能性がある。したがって、仲間とともに自治的に「集い」「話し合い」を行いながら、「人の役に立つ」活動に取り組むというトータルな把握が欠かせないものであり、そのプロセスをじっくり保障する視点を見失わないようにすることが重要だと思われる。

「ボランティアパスポート」を使った取り組みを展開する場合も、活動内容についての「話し合い」や、取り組みの後の振り返りに関する「集いあい」活動が行われているのかどうかに注目する必要がある。

## 5. 『ボランティアパスポート』のキッカケ作りとしての役割を問い直す

「ボランティアパスポート」が取り組みのキッカケとなり、最初は先生や親に誘われて取り組みに参加したとしても、また最初は、本来のボランティア活動の内容からは外れた取り組みだったとしても、第1歩を踏み出し、他の人々と体験を共有するプロセスを通じて、次第に「人の役に立つことの気持ちよさ」や「感謝された時の喜び」、さらに「自分から進んで取り組む気持ち」が大切であること」の発見など、さまざまな“気づき”を得ることが重要であろう。

そうしたプロセスにおいて、子どもたちが感じ、つかんだ“気づき”を大切にして、「人の役に立つ」活動へと発展させていくことができるように、丁寧に導いていくことができる大人の姿勢と役割こそが問われているのである。

## 平成 26 年度ふれあいボランティアパスポート事業における ふれあいボランティア活動の継続性の意義についての調査

### 【さわやか青少年センターについて】

さわやか青少年センターは、子どもの健全育成のためには子ども自らが『人間力』（自ら生きていこうとする「自助の力」とみんなで助け合って生きていこうとする「共助の力」）を育むことが大切であると考えています。

当センターではふれあいボランティア活動（ボランティア活動において、人と人とのふれあいを重視しながら取り組むボランティア活動のこと。以下、ボランティア活動という）に子どもたちに取り組んでもらうことが最善であると考え、小中高等学校にボランティア活動の取り組み実施を働きかけています。その際には、児童、生徒が自ら喜んでボランティア活動に取り組めるように、ボランティア活動の「きっかけ」と「継続」に効果を発揮する“ふれあいボランティアパスポート”（公益財団法人さわやか福祉財団が平成 12 年度開発）をツールとして活用しています。（ふれあいボランティアパスポートの詳細は、さわやか青少年センターホームページに掲載）

平成 26 年度は、全国の小中高等学校 135 校 5 団体でボランティア活動にこのふれあいボランティアパスポート（以下ふれあいパスポートという）を活用しており、参加児童、生徒数は 41, 042 人です。

### 【ふれあいパスポートの成果の検証について】

当センターでは、在学中の児童、生徒の『人間力』がどのように育まれているかについては、ふれあいパスポートの感想欄や感想文の募集によって検証を行っており、その成長については確認できていると思っています。しかし、最も大切なことは、児童、生徒が卒業して社会人になっても『人間力』を発揮してくれているかということです。このことについての検証は、ボランティア活動に取り組んだ児童、生徒が成人を迎えていない段階では検証ができませんでした。

しかし、さわやか福祉財団が、児童、生徒のふれあいパスポートを活用したボランティア活動の普及に取り組み始めた平成 12 年度から当センターが取り組んでいる一昨年、平成 24 年度までの 13 年間に社会人となった人たちが出てきました。

そこで、平成 15 年度から昨年度まで教育委員会として継続して全ての小中学校でふれあいパスポートを使って（現在は神崎市オリジナルのパスポートを作成し、ふれあいパスポートフレンズとして参加している）ボランティア活動に取り組んでいる佐賀県神崎市にご協力をいただき、平成 24 年度から、佐賀県神崎市新成人のボランティア活動アンケート調査を実施しています。

平成 15 年度当時は、町村合併前の旧千代田町の小学校 3 校、中学校 1 校の全 4 校の児童生徒がふれあいパスポートを活用し、平成 24 年度、当時小学 5 年生だった児童達が新成人になりました。その新成人 32 人からアンケートの回答をもらいました。そして、翌平成 25 年度は、新成人 55 人から回答をもらいました。

そして、平成 26 年度も、平成 27 年 1 月 11 日（日）の成人式開催当日、成人式会場にて実施しました。神崎市の旧千代田町の新成人 131 人（当時小学校 3 年生で中学 3 年まで 6 年間ふれあいパスポート使用中、成人式に出席した 106 人を対象にアンケート調査を実施し、39 人の新成人からアンケートに回答をもらいました。

そこで、平成 26 年度は神崎市（旧千代田町のみ）の状況を分析するとともに、これまでの 3 年間の比較を行いました。その結果は、以下の通りです。（但し、今回の分析は神崎市のみのものであり、あくまでも 39 人の回答から見たまとめです。次年度以降も、継続して、分析を続けていきたいと考えています。）

このデータの集計に当たっては、統計処理には埼玉純真短期大学講師齋藤史夫先生のご協力をいただき、また、早稲田大学文学学術院教授増山均先生に監修をお願いいたしました。



◆ボランティア活動に全校で取り組んだ小、中学校を卒業した新成人の**64.1%**がボランティア活動に取り組んでいる。平成24年度は**62.5%**、平成25年度は**52.7%**であり、引き続き、高い比率となっている。

総務省統計局が5年ごとに調査している社会生活基本調査の平成23年度調査では、20歳～24歳の社会人がボランティア活動に取り組んでいる比率は**21.2%**です。神崎市の新成人と社会生活基本調査の比率と比較すると平成24年度は約**3倍**、平成25年度は約**2.5倍**、平成26年度は**3倍強**という高い比率を保っている。（グラフ23 P18より）

◆小中高等学校と段階的、継続的にボランティア活動をした児童、生徒は、新成人になってもボランティア活動をする比率が**75.0%**と高い。平成24年度は**84.2%**、平成25年度は**67.6%**、と約7割から8割以上であり、引き続き、高い比率となっている。

このことは、以下のことを基にしています。（グラフ21、22 P17より）

- 小学校時代にボランティア活動に取り組んだ児童は、新成人の現在も**70.6%**がボランティア活動に取り組んでいます。（平成24年度**72.0%**、平成25年度**55.3%**）
- 中学校時代にボランティア活動に取り組んだ生徒は、新成人の現在も**70.6%**がボランティア活動に取り組んでいます。（平成24年度**70.8%**、平成25年度**54.5%**）
- 高等学校時代にボランティア活動に取り組んだ生徒は、新成人の現在も**73.3%**がボランティア活動に取り組んでいます。（平成24年度**85.0%**、平成25年度**65.8%**）
- 小中高等学校と継続してボランティア活動に取り組んだ児童、生徒は、新成人の現在も**75.0%**がボランティア活動に取り組んでいます。（平成24年度**84.2%**、平成25年度**67.6%**）

◆アンケート調査実施対象者の、各年代毎のボランティア活動の取り組みを社会生活基本調査と神崎市を比較すると、平成26年度は年代によって**2.4倍～3.3倍**の比率となっており、平成24年度、25年度に引き続き、神崎市がいずれの年代でも高い比率となっている。

このことは、以下のことを基にしています。（グラフ23 P18より）

神崎市（旧千代田町のみ）

〔小学校時代〕 平成26年度（9歳～12歳 **87.2%**）  
平成24年度（11歳～12歳 **78.1%**）平成25年度（10歳～12歳 **85.5%**）  
社会生活基本調査（平成13年）10歳～14歳 **36.3%**（※最も低い調査対象年齢層）

〔中学校時代〕 平成26年度（13歳～15歳 **87.2%**）  
平成24年度（同 **84.4%**）、平成25年度（同 **80.0%**）  
社会生活基本調査（平成18年）10歳～14歳 **28.2%**

〔高等学校時代〕 平成26年度（16歳～18歳 **76.9%**）  
平成24年度（同 **62.5%**）、平成25年度（同 **69.1%**）  
社会生活基本調査（平成18年）15歳～19歳 **23.0%**

新成人 平成26年度（20歳 **64.1%**）  
社会生活基本調査（平成23年）20歳～24歳 **21.2%**

◆ボランティア活動は、高校時代に取り組むことが重要である。高校時代にボランティア活動に取り組むと新成人になってボランティア活動に取り組む可能性が高い。ただし、小中学校時代にボランティア活動に取り組んだ児童生徒は高校時代にも取り組む比率は大変高いことから、小中学校時代にもボランティア活動に取り組む事が重要と考えられる。

各年代と新成人のボランティア活動の取り組みの関係をみると、ボランティア活動を高校時代に取り組むと新成人になってもボランティア活動をする比率が高い（73.3%）。平成 24 年度から平成 26 年度までの 3 年間をみると小学校、中学校時代よりも高校時代にボランティア活動を行った新成人はボランティア活動に取り組む可能性が高いと考えられます。

（グラフ 21、22 P17 より）

神崎市（当時千代田町）教育委員会管轄の小中学校を卒業し、高等学校に進学した生徒たちは入学した高等学校によってボランティア活動への取り組み姿勢が異なるにもかかわらず、平成 26 年度は **76.9%**（平成 25 年度 **69.1%**、平成 24 年度 **62.5%**）という高い比率になっており、平成 24 年度、平成 25 年度を上回る、高い比率になっています。（グラフ 10 P14 より）

小学校でボランティア活動に取り組んだ児童が高等学校でボランティア活動に取り組んだ比率は平成 26 年度 **82.4%**（平成 24 年度 **76.0%**、25 年度 **76.6%**）、中学校でボランティア活動に取り組んだ生徒は高等学校でボランティア活動に取り組んだ比率が平成 26 年度は **88.2%**（平成 24 年度 **70.4%**、平成 25 年度 **77.3%**）と高いことから、小学校、中学校で積極的にボランティア活動に取り組んでいることが高等学校でのボランティア活動の比率を高くしていると考えられます。（グラフ 10、11～14 P14 より）

**◆神崎市のボランティア活動に取り組む新成人は、自発的に取り組む傾向にあり、ボランティア精神が培われてきていると思われる。**

現在、ボランティア活動に取り組んでいる理由を複数回答で聞いたところ、平成 24 年度から平成 26 年度までの比較を見てみると、「学校・会社が積極的に取り組んでいるから」が多いものの、その次に「社会の役に立つから」、「自分のためになるから」という「社会性」、「自発性」というボランティア精神に関係する理由が多く、その理由が 3 年間を通して増加傾向にあります。

このことは、平成 15 年度からふれあいボランティアパスポートをきっかけにしたボランティア活動の取り組みの年数が増えていくことと関係している可能性があるかも知れません。当然、児童生徒の活動歴も増えていくためです。今後も調査を継続することで検証していきます。

（グラフ 17 P15 より）

**◆ふれあいボランティアパスポートは、児童、生徒にとって有効なツールであると考えられる。**

当センターが配布しているボランティアパスポートについて、新成人に小学校在学当時、ボランティア活動に取り組むに当たって有効であったか尋ねたところ **71.8%**（平成 24 年度 **84.4%**、平成 25 年度 **76.4%**）が有効であったと回答し、中学校在学当時においても **71.8%**（平成 24 年度 **75.0%**、平成 25 年度 **78.2%**）が有効であったと回答しています。

（グラフ 3、4 P12 / グラフ 7、8 P13 より）

小学校では平成 24 年度から平成 26 年度までの 3 年間の推移は減少傾向にあるものの **70%**以上という高い比率を保っており、また、中学校でも減少しているが同じく **70%**以上であり、昨年度に続き、ふれあいパスポートの有効性は検証されたと考えています。当センターでは、今後も引き続き検証を継続していきます。

以上のような検証結果から、子どもの時から継続的にボランティア活動に取り組むことは大変有意義であると考えています。各学校におかれましては、積極的にふれあいボランティア活動に取り組んでいただきたいと思っています。

その際には、児童、生徒がより主体的、継続的に取り組むよう、ボランティアの意義の理解を進めたり、当センターのふれあいボランティアパスポートなどのような意欲を出させる「きっかけ」となるツールの提供や「継続」のための仕組みづくりや様々な活動の情報の提供、また、活動を誉めたり、認めたりする工夫をするなど、ご検討いただければ幸いです。

今後も小中高高等学校時代にボランティア活動に取り組んだ新成人への調査を行い、検証を継続していく予定です。

## 新成人ボランティア活動アンケート調査Ⅲの概要

(ふれあいボランティアパスポートを使ったボランティア活動の継続性についての検証)

### 【趣旨】

ふれあいボランティアパスポートは、概ね小中高等学校の児童、生徒を対象にボランティア活動の「きっかけ」と「継続」に有効なツールとして開発されたものです。(さわやか青少年センターのホームページに詳細を掲載。URL：<http://www.ssc-npo.or.jp>)

平成 12 年度からふれあいボランティアパスポート事業に取り組み始めて、平成 27 年 3 月まで丸 15 年が経過しました。その間、多くの小中高校の児童生徒にこのツールを使ってボランティア活動に参加してもらっています。

しかし、小中高等学校を卒業した後、彼ら彼女らが大人になってもボランティア活動に取り組んでいるかどうかについて検証できるまでに至っていませんでしたが、平成 24 年度から検証を開始いたしました。

その理由は、平成 15 年度から全小中学校の児童生徒がふれあいボランティアパスポートを使ってボランティア活動に取り組んでいただいている佐賀県神埼市教育委員会のご協力をいただき、平成 24 年度から新成人へのアンケート調査が可能になったからです。

平成 26 年度は、平成 27 年 1 月 11 日(日)に佐賀県神埼市の旧千代田町の成人式に参加する新成人(平成 26 年度内に 20 歳となる人たち)を対象に、小中学校時代から新成人になるまでの間のボランティア活動への取り組み状況についてアンケート調査を行い、小中学校在学時と卒業後の新成人におけるボランティア活動の実施状況までを調査し、その継続性について検証を試みました。

### 【アンケート対象団体・対象者と調査方法】

(対象団体)

ふれあいボランティアパスポート事業参加の教育委員会

○佐賀県神埼市教育委員会(当時、合併前の千代田町教育委員会所管下の小中学校)

平成 15 年度から参加の全小学校 3 校、中学校 1 校

(対象者)

○平成 15 年度当時、ふれあいボランティアパスポートを使用してボランティア活動に取り組んでいる千代田町の小学校に小学 3 年生として在学し、平成 21 年度には中学 3 年生になり、7 年間在学した児童、生徒で、平成 26 年度内に 20 歳になった新成人のうち、成人式に出席した新成人。

(調査方法)

○平成 27 年 1 月 11 日(日)、神埼市で行われた成人式に出席した旧千代田町の新成人に対してアンケート調査用紙と鉛筆を配布し、記入してもらい、成人式終了時に会場退出時に回収した。

### 【調査の概要】

○佐賀県神埼市教育委員会(当時千代田町教育委員会所管下)

平成 26 年度新成人 131 人、成人式参加者 106 人中 39 人(37%)から回答を得ました。

(平成 24 年度新成人 141 人、成人式参加者 127 人中 32 人(23%)が回答。)

(平成 25 年度新成人 129 人、成人式参加者 112 人中 55 人(43%)が回答。)

# 新成人アンケート調査のまとめ

## ※グラフの見方について

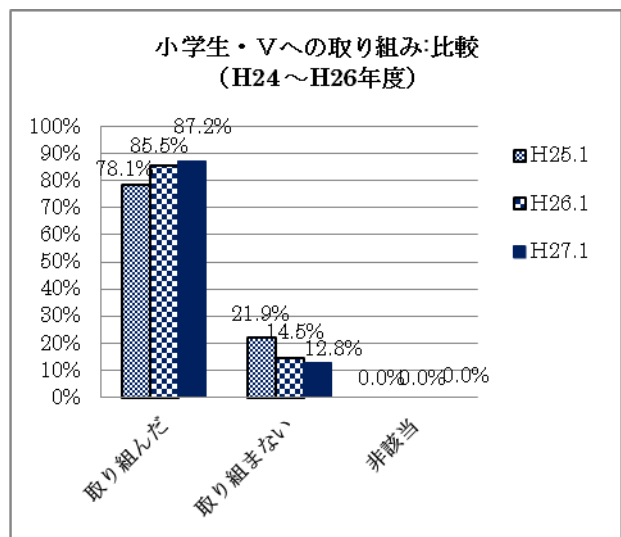
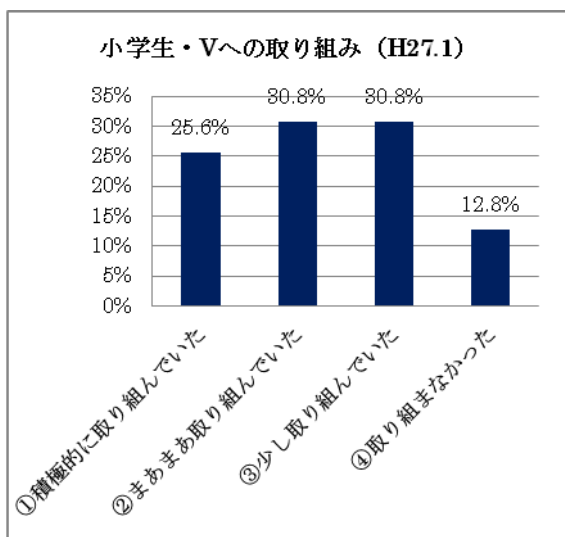
グラフにおけるVはボランティア活動のこと。また、推移グラフの各年度の比較は肯定的な意見(「積極的」から「少し」まで)を合わせて比較。グラフの比率は小数点以下2桁を四捨五入。

グラフの H25.1 は平成 24 年度、H26.1 は平成 25 年度、H27.1 は平成 26 年度。

### 【小学校でのボランティア活動】

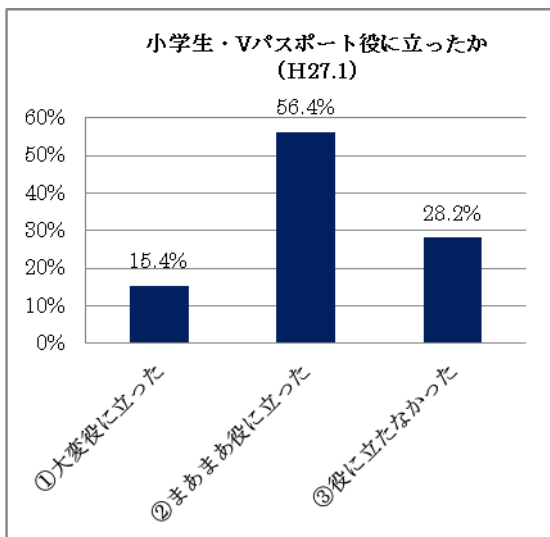
佐賀県神埼市でふれあいボランティアパスポートを使ったボランティア活動に取り組み始めたのは、平成 15 年度からで、今回調査した新成人は当時小学 3 年生から 6 年生までの 4 年間、活動に取り組んでいます。

小学校の時にボランティア活動に取り組んでいたか尋ねたところ、何らかの形で **87.2%**が取り組んでいたと回答しました。平成 24 度は **78.1%**、平成 25 年度は **85.5%**であり、平成 26 年度は更に高い比率となっています。(グラフ 1、2 より)

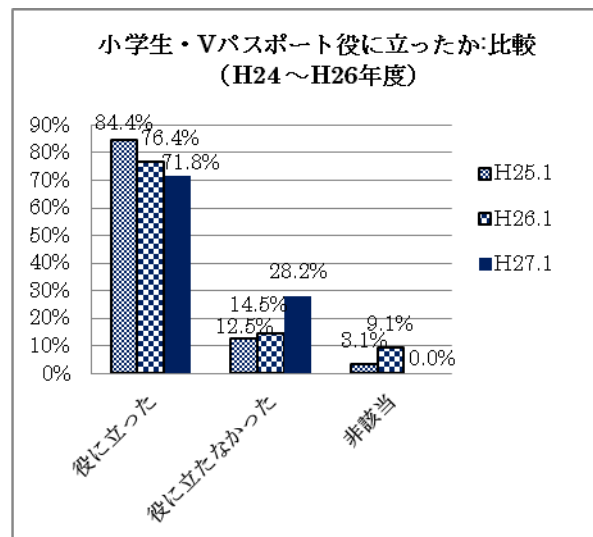


### 【ふれあいボランティアパスポートは役に立ったか】

ボランティア活動に取り組むきっかけとして、配布されたふれあいボランティアパスポートについて、役に立ったと思うか尋ねたところ、**71.8%**が役に立ったと回答しました。平成 24 年度は **84.4%**、平成 25 年度は **76.4%**であり、平成 26 年度も引き続き、高い比率となっています。(グラフ 3、4 より)



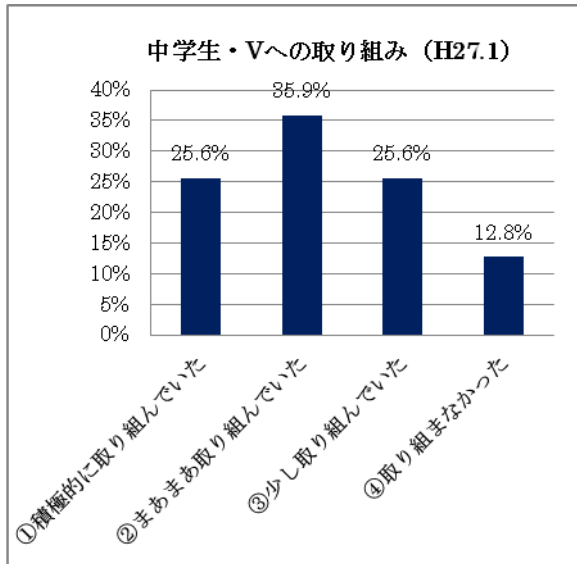
(グラフ 3)



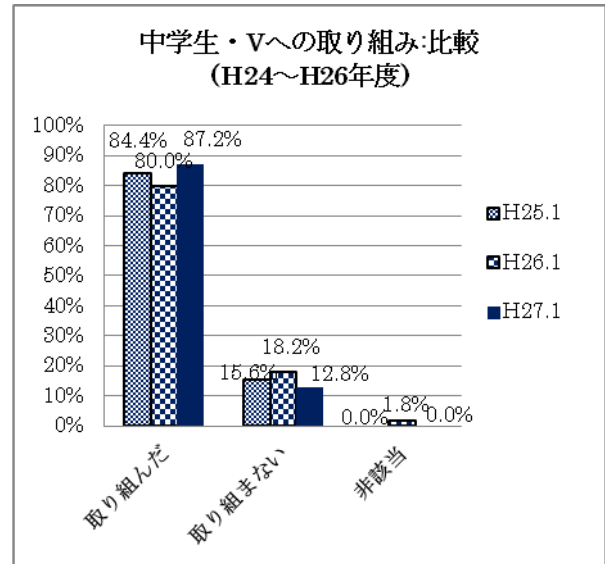
(グラフ 4)

中学校では、ふれあいボランティア活動を生徒が入学して卒業するまでの3年間、継続して取り組んでいます。

そこで、中学校の時にボランティア活動に取り組んでいたか尋ねたところ何らかの形で**87.2%**が取り組んでいたと回答しました。平成24年度は**84.4%**、平成25年度は**80.0%**であり、平成26年度も引き続き、高い比率となっています。(グラフ5、6より)



(グラフ5)

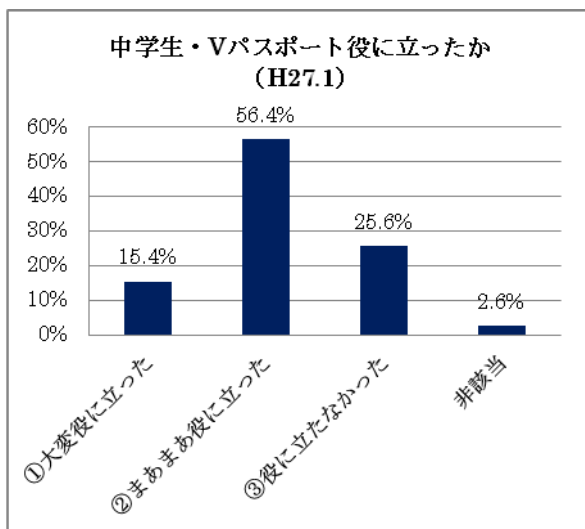


(グラフ6)

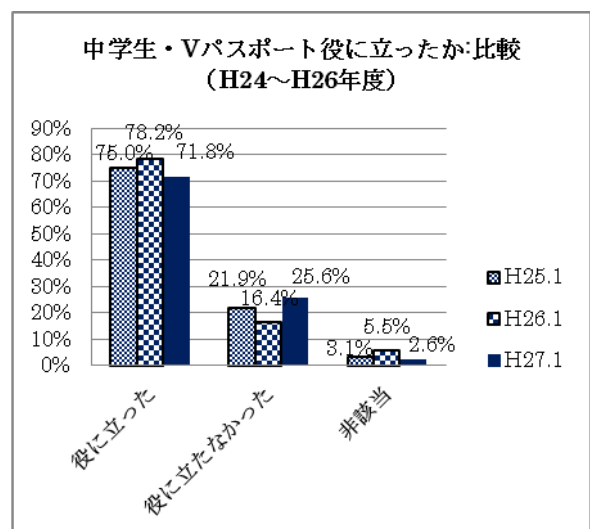
**【ふれあいボランティアパスポートは役に立ったか】**

ボランティア活動に取り組むきっかけとして、配布していたふれあいボランティアパスポートについて、役に立ったと思うか聞いたところ、**71.8%**が役に立ったと回答しました。平成24年度は**75.0%**、平成25年度は**78.2%**であり、平成26年度も引き続き、高い比率となっています。

(グラフ7、8より)



(グラフ7)

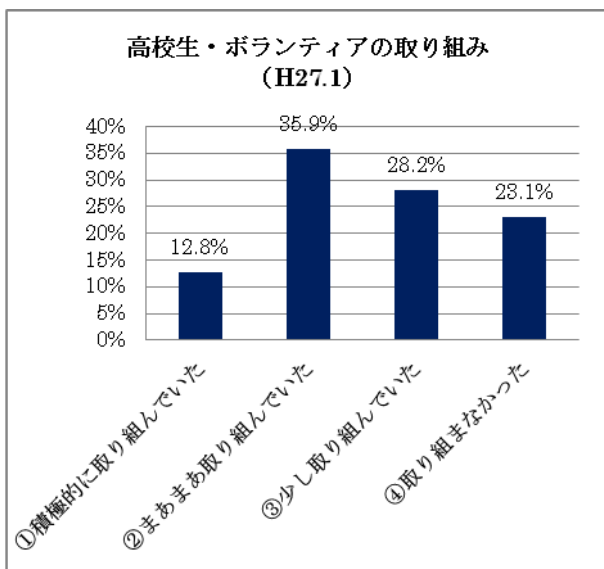


(グラフ8)

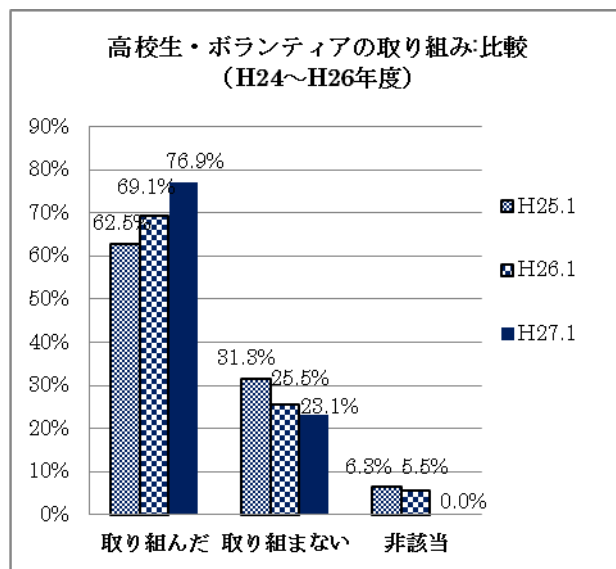
### 【高等学校でのボランティア活動】

小中学校は神埼市教育委員会の管理下にある学校ですが、高等学校は神埼市の所管ではなく、県立、国立、私立などの区別があり、ボランティア活動の取り組みについては新成人たちが当時入学した高等学校によって状況がかなり異なっているのではないかと考えられていましたが、高等学校になっても**76.9%**がボランティア活動に取り組んでいたと回答しました。

平成 24 年度は **62.5%**、平成 25 年度は **69.1%**であり、平成 26 年度は更に高い比率となっています。  
(グラフ 9、10 より)



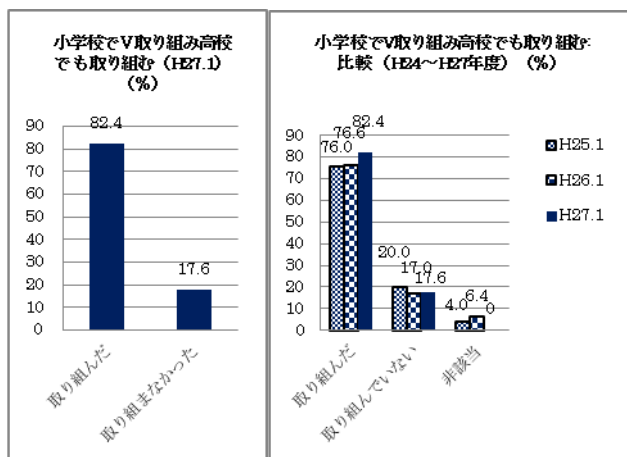
(グラフ 9)



(グラフ 10)

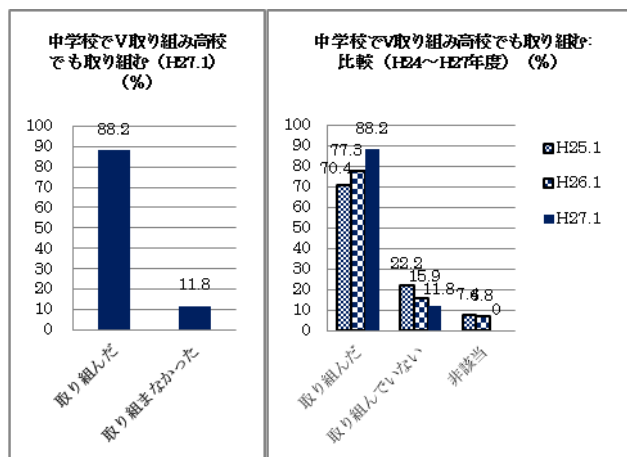
次に、小学校の時にボランティア活動に取り組んでいた児童は、高等学校になっても **82.4%**がボランティア活動に取り組んでおり、平成 24 年度は **76.0%**、平成 25 年度は **76.6%**でした。中学校の時にボランティア活動に取り組んでいた生徒は、高等学校になっても **88.2%**がボランティア活動に取り組んでおり、平成 24 年度は **70.4%**、平成 25 年度は **77.3%**でした。

平成 26 年度は、小学校と高等学校、中学校と高等学校、ともに更に高い比率となっています。  
(グラフ 11、12、13、14 より)



(グラフ 11)

(グラフ 12)



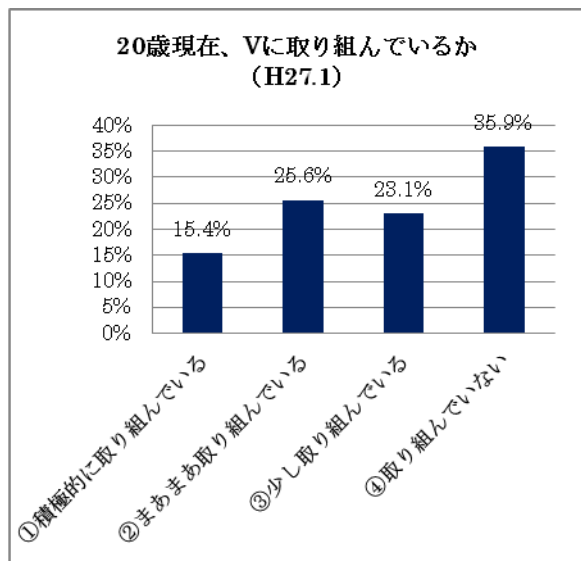
(グラフ 13)

(グラフ 14)

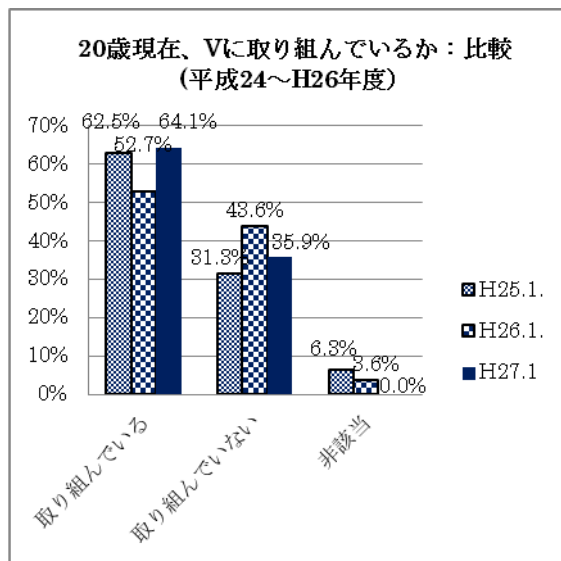


### 【新成人はボランティア活動に取り組んでいるか】

新成人に、現在、ボランティア活動に取り組んでいるか聞いたところ、何らかの形で**64.1%**が取り組んでいるという回答でした。平成24年度は**62.5%**、平成25年度は**52.7%**であり、平成26年度も引き続き、高い比率となっています。(グラフ15、16より)



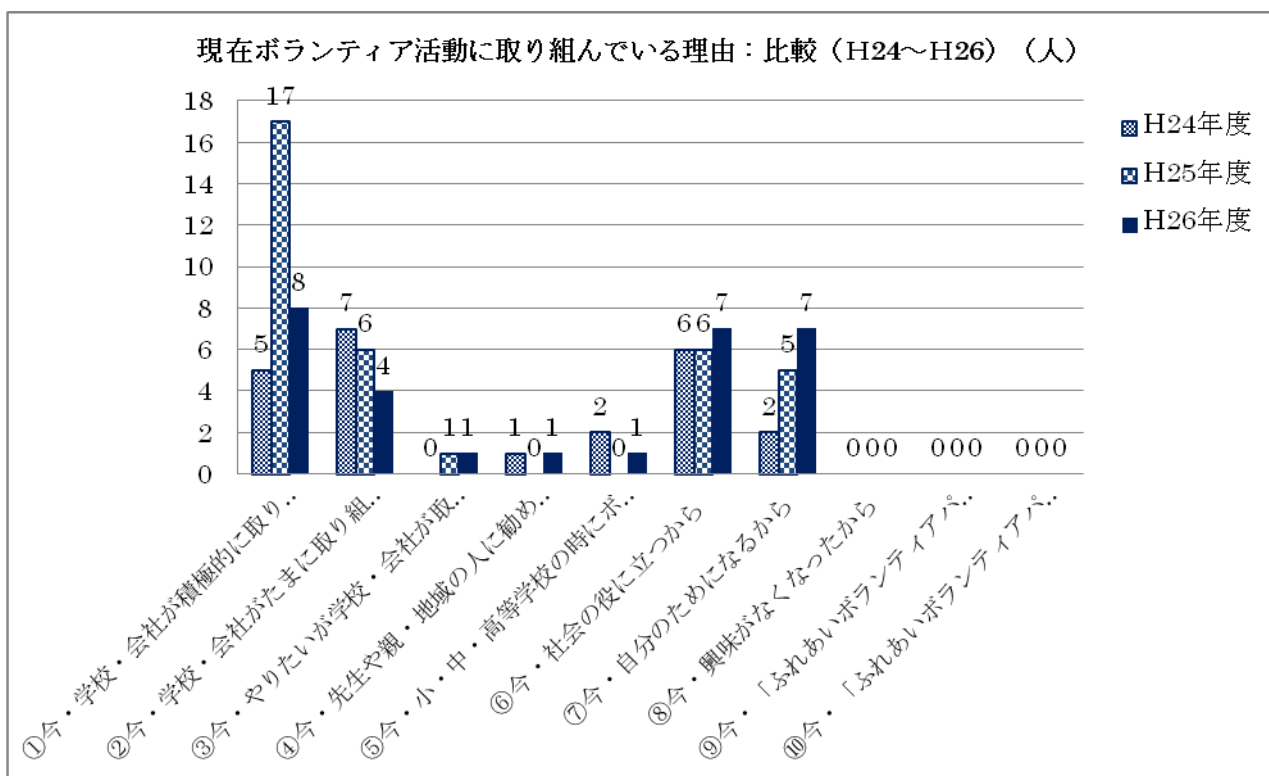
(グラフ15)



(グラフ16)

### 【現在、ボランティア活動に取り組んでいる理由】(複数選択)

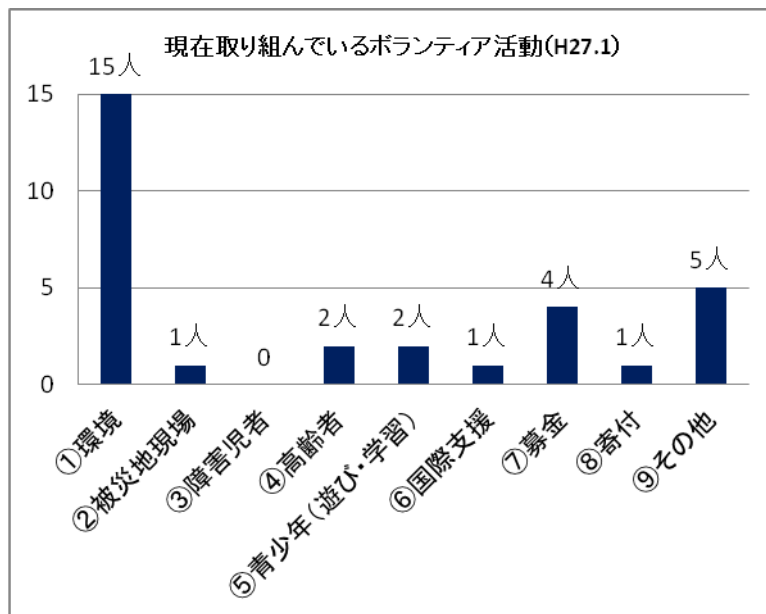
現在、ボランティア活動に取り組んでいる理由は、平成26年度は「学校・会社が積極的に取り組んでいるから」が8人で最も多く、次に「社会の役に立つから」、「自分のためになるから」が同じ7人で続き、次に「学校・会社がたまに取り組んでいるから」が4人と続いています。平成24年度、平成25年度、平成26年度を見ると⑥「社会の役に立つから」・⑦「自分のためになるから」の数が増加傾向にあります。(グラフ17より)



(グラフ17)

### 【現在取り組んでいるボランティア活動の内容】

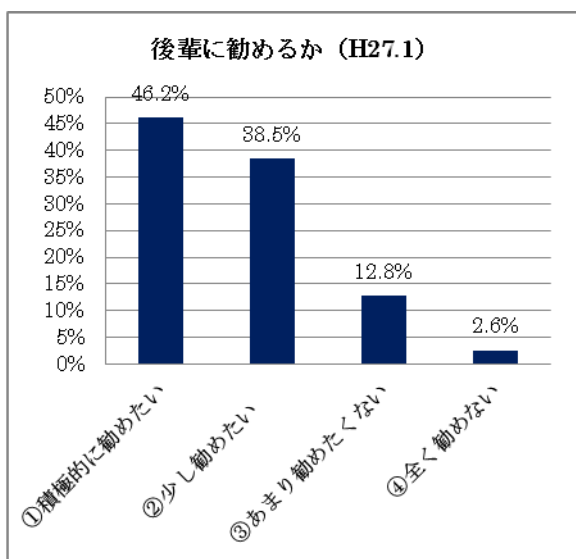
8つの活動内容とその他を含め9つの選択肢を示したところ、「環境」に対するボランティア活動が最も多く、次に「その他」、「募金」、「高齢者」と「青少年（遊び・学習）」と続いている。「その他」が多いことは、ボランティア活動の多様な広がりによるものではないかと考えています。（グラフ 18 より）



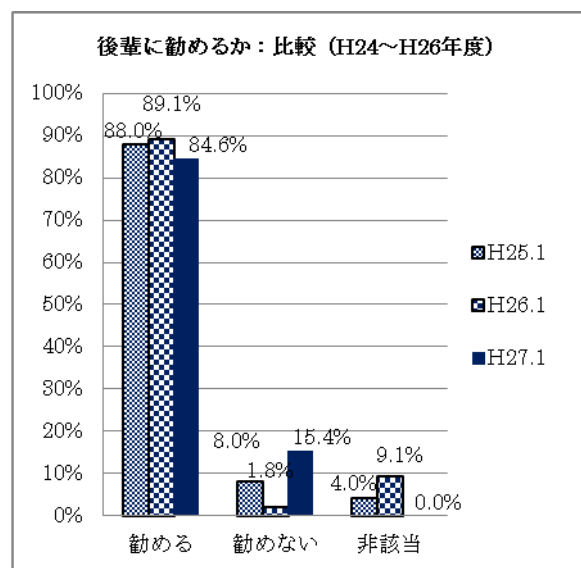
(グラフ 18)

### 【新成人は後輩にボランティア活動を勧めるか】

新成人に、後輩の児童、生徒に対してボランティア活動への取り組みを勧めるか聞いたところ、**84.6%**が勧めたいという回答でした。平成 24 年度 **88.0%**、平成 25 年度 **89.1%**であり、平成 26 年度も引き続き、高い比率となっています。（グラフ 19、20 より）



(グラフ 19)



(グラフ 20)



### 【各年代と新成人のボランティア活動の取り組みの関係】

小学校時代にボランティア活動に取り組んでいたと回答した新成人は、**70.6%**が現在もボランティア活動に取り組んでいると回答しています。平成 24 年度 **72.0%**から平成 25 年度 **55.3%**と低下しましたが、平成 26 年度はまた高い比率となっています。

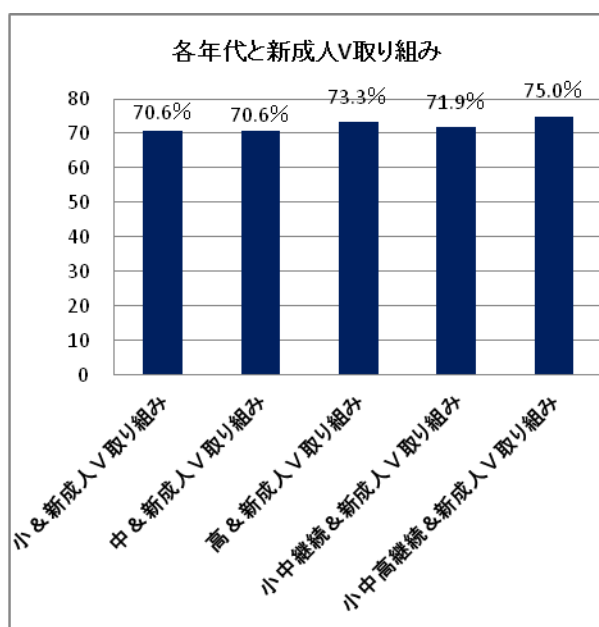
同様に、中学校時代にボランティア活動に取り組んでいたと回答した新成人は、**70.6%**が現在もボランティア活動に取り組んでいると回答しています。平成 24 年度 **70.8%**から平成 25 年度 **54.5%**と低下しましたが、平成 26 年度はまた高い比率となっています。

高等学校時代にボランティア活動に取り組んでいたと回答した新成人は、**73.3%**が現在も取り組んでいると回答しています。平成 24 年度 **85.0%**から平成 25 年度 **65.8%**と低下しましたが、平成 26 年度はまた高い比率となっています。

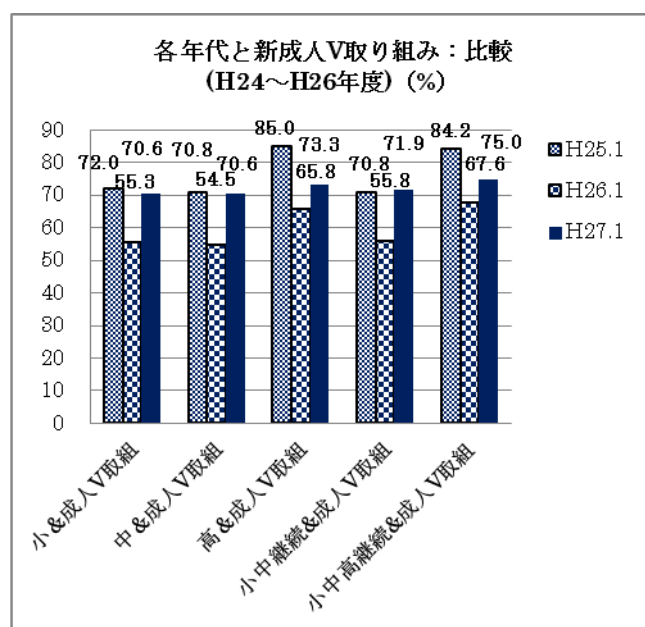
また、小学校、中学校で継続してボランティア活動に取り組んでいたという新成人は **71.9%**が現在も継続してボランティア活動に取り組んでいます。平成 24 年度 **70.8%**から平成 25 年度 **55.8%**と低下しましたが、平成 26 年度はまた高い比率となっています。

同様に、小中高等学校で継続してボランティア活動に取り組んでいたという新成人は **75.0%**が現在も継続してボランティア活動に取り組んでいます。平成 24 年度 **84.2%**から平成 25 年度 **67.6%**と低下しましたが、平成 26 年度はまた高い比率となっています。

(グラフ 21、22 より)



(グラフ 21)



(グラフ 22)

### 【ボランティア活動の社会生活基本調査と神埼市の比較】

神埼市の新成人の子ども時代に近い時期の社会生活基本調査（総務省統計局）から、同等の年代のボランティア活動への参加についての比較を試みました。（※比較する値の対象数にひらきがありすぎため、あくまでも参考として紹介するものです。）（グラフ 23 より）

#### （小学校時代）

平成 13 年社会生活基本調査（10 歳～14 歳※最も低い調査対象年齢層）のボランティア活動への取り組みは **36.3%** でしたが、神埼市の平成 26 年度調査で社会生活基本調査の年齢層に最も近い、平成 15 年度当時ボランティア活動に取り組んだ小学生（3 年生＝9 歳）は **87.2%**（社会生活基本調査の **2.4 倍**）でした。平成 24 年度（11 歳）**78.1%**（約 **2.2 倍**）、平成 25 年度（10 歳）**85.5%**（約 **2.4 倍**）であり、平成 26 年度も引き続き、高い比率となっています。

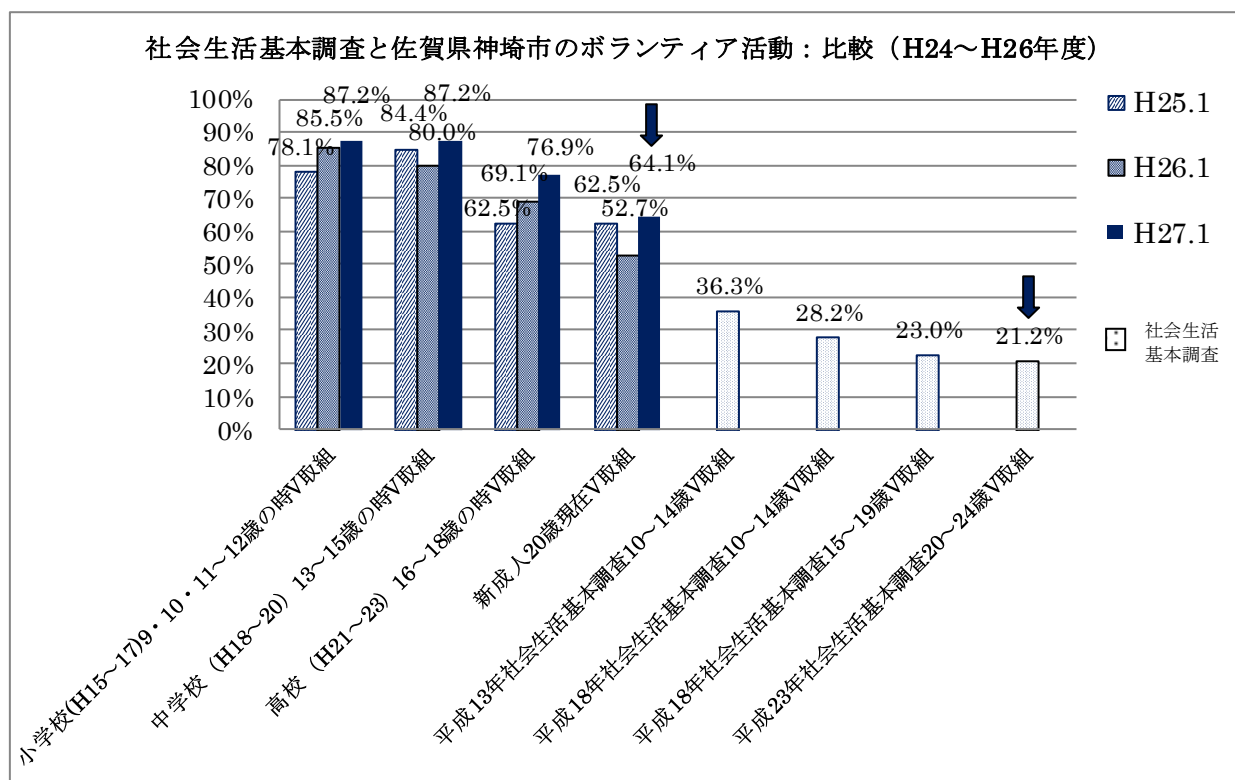
#### （中学校・高等学校時代）

平成 18 年社会生活基本調査（10 歳～14 歳）のボランティア活動への取り組みは **28.2%** でしたが、神埼市の平成 26 年度調査では社会生活基本調査の年齢層に最も近い、平成 18～20 年度当時ボランティア活動に取り組んだ中学生（1～3 年生＝13 歳～15 歳）は **87.2%**（**3.1 倍**）でした。平成 24 年度 **84.4%**（約 **3 倍**）、平成 25 年度 **80.0%**（**2.8 倍**）であり、平成 26 年度も引き続き、高い比率となっています。

平成 18 年社会生活基本調査（15 歳～19 歳）のボランティア活動への取り組みは **23.0%** でしたが、神埼市の平成 26 年度調査で社会生活基本調査の年齢層に最も近い、平成 21～23 年度当時の高校生（16 歳～18 歳）は **76.9%**（**3.3 倍**）でした。平成 24 年度 **62.5%**（**2.7 倍**）、平成 25 年度 **69.1%**（**3 倍**）であり、平成 26 年度は更に高い比率となっています。

#### （新成人）

平成 23 年社会生活基本調査（20 歳～24 歳）のボランティア活動への取り組みは **21.2%** でしたが、神埼市の平成 26 年度調査では社会生活基本調査の年齢層に最も近い、平成 26 年度の新成人（20 歳）は **64.1%**（**3 倍**）でした。平成 24 年度 **62.5%**（約 **3 倍**）、平成 25 年度 **52.7%**（約 **2.5 倍**）であり、平成 26 年度も引き続き、高い比率となっています。



（グラフ 23）

### 3について

## 「ボランティア活動についての教員の意識調査について」

### 1. 基本のまとめ

子どものボランティア活動活性化のために、それを指導する教員の意識を調査することを目的として上記の意識調査を実施した。

#### ■対象

さわやか青少年センターのふれあいボランティアパスポート（以下ふれあいパスポート、またはFVPという）を活用してボランティア活動（体験学習）を行っている小中学校17校と、当センターと関わりのないボランティア活動を行っているかどうか不明の小中学校6校の教員。

- ・ふれあいパスポート活用してのボランティア活動歴 10年～12年 9校
- ・ふれあいパスポート活用してのボランティア活動歴 1年～3年 8校
- ・ふれあいパスポート活用はなく、ボランティア活動歴不明 6校

#### ■アンケート回収数

参加教員数527人 回答者数429人 回答率81.4%

- ・ふれあいパスポート活用してのボランティア活動歴 10年～12年 9校  
195人中174人回答
- ・ふれあいパスポート活用してのボランティア活動歴 1年～3年 8校  
165人中134人回答
- ・ふれあいパスポート活用はなく、ボランティア活動歴不明 6校  
167人中121人回答

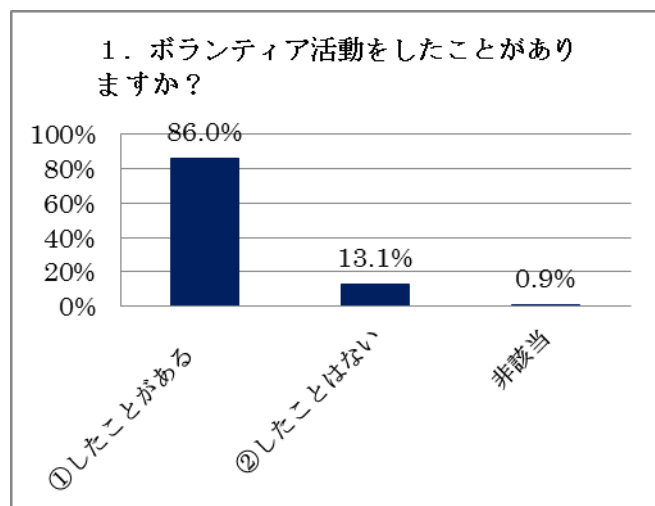
#### ■アンケート調査実施時期

平成26年12月10日（水）～平成26年12月26日（金）

### 1. あなた自身、これまでにボランティア活動をしたことがありますか。（1つ選んで下さい。）

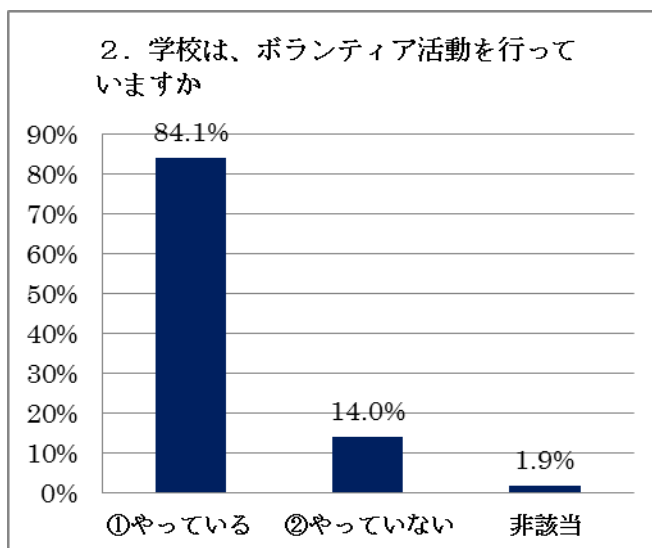
86.0%の先生がボランティアをしたことがあると回答しています。

したことがないと回答した先生も、13.1%いました。



2. あなたの勤務する学校では、ボランティア活動を行っていますか。(1つ選んで下さい。)

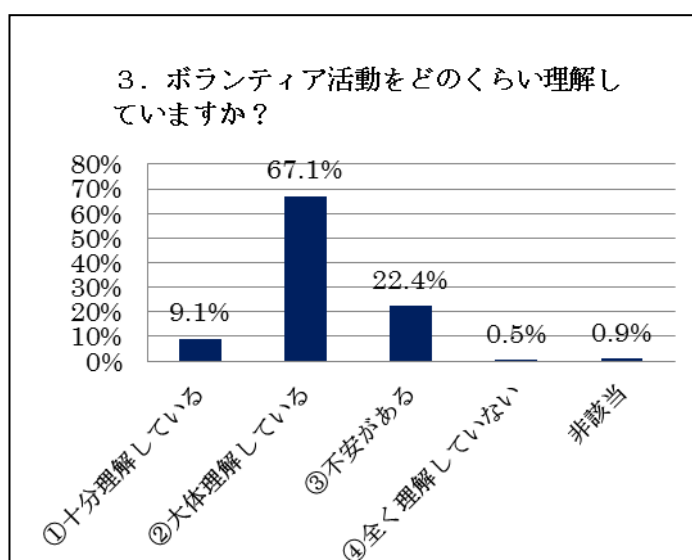
84.1%の先生が、学校でボランティアをしていると回答しています。



3. あなた自身は、ボランティア活動について、どのくらい理解していると思っていますか？(1つ選んで下さい。)

9.1%の先生が「十分理解している」、67.1%の先生が「大体理解している」と、76.2%の先生が理解していると回答しています。

「全く理解していない」という先生はほとんどいませんが、22.4%の先生が「不安がある」と答えています。

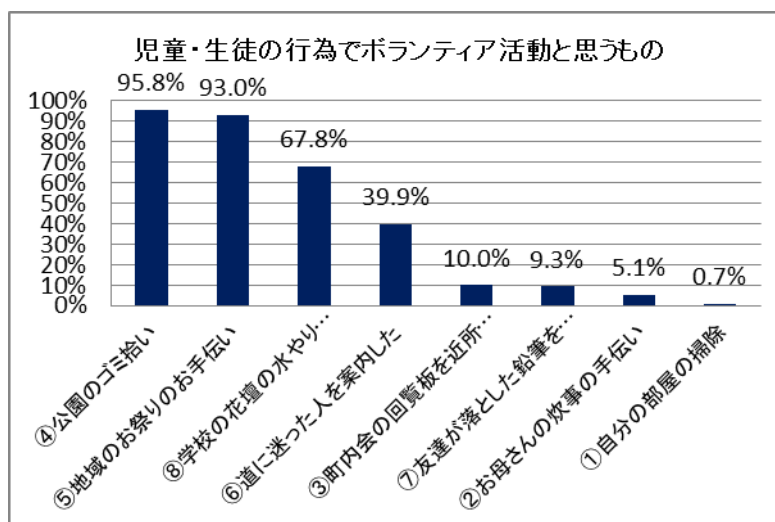


4. 次の、児童・生徒が行った行為のうち、ボランティア活動だと思うものにいくつでも○をつけて下さい。(複数回答)

「公園のゴミ拾い」95.8%。「地域のお祭りのお手伝い」93.8%の2つの項目への回答が、9割を超えています。

ついで、「学校の花壇の水やり(役割・当番外)」、「道に迷った人を案内した」が39.9%です。

「町内会の回覧板を近所家に届けた」「友達が落とした鉛筆を拾ってあげた」についても、1割ほどの先生が肯定的に回答しています。

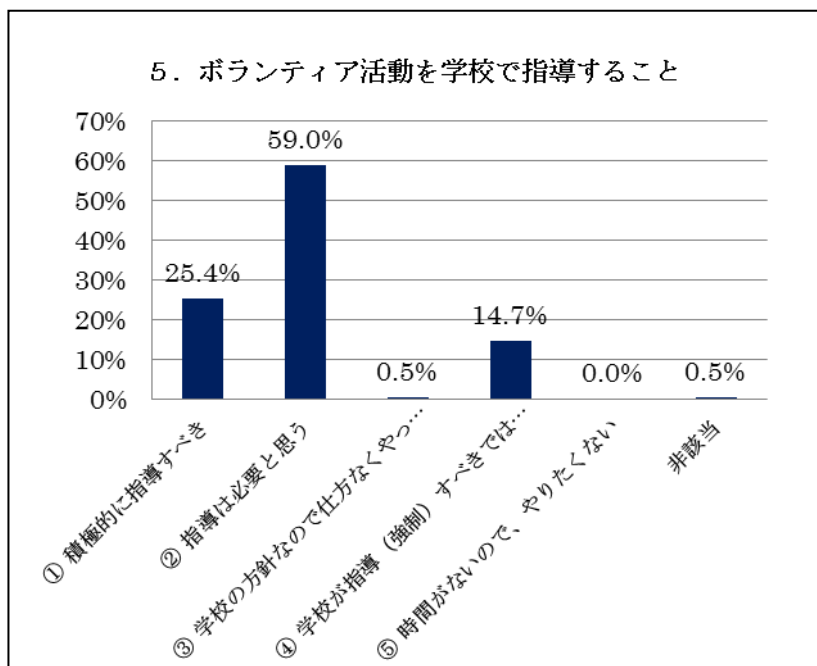


5. ボランティア活動を学校で指導することについて、どう思いますか？（1つ選んで下さい）

25.4%の先生が「積極的に指導すべき」と回答しています。「指導は必要と思う」

59.0%とあわせて、約 85%の先生が、ボランティア活動を学校で指導することは必要だと考えています。

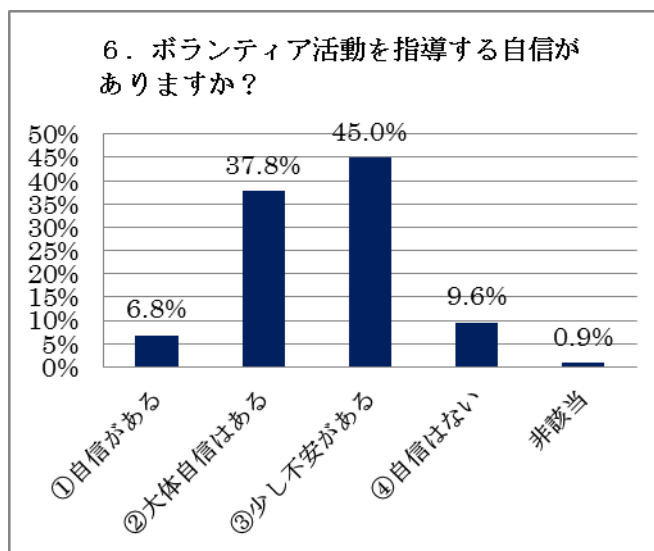
他方、「ボランティア活動は自主性が大事なので、学校が指導（強制）すべきではない」と考える先生も 14.7%います。



6. 児童・生徒にボランティア活動を指導する自信がありますか？（1つ選んで下さい）

「自信がある」6.8%、「大体自信はある」37.8%と 44.5%の先生が、指導に自信があると回答しています。

一方、45.0%の先生が「少し不安がある」、9.6%の先生が「自信はない」と回答しています。

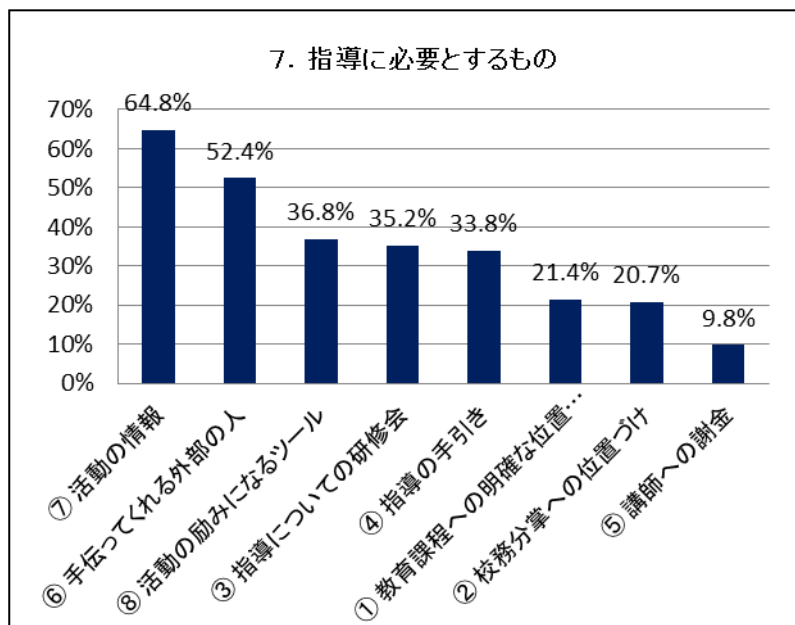


7. 児童・生徒にボランティア活動を指導するためには、何があればよいですか？（複数回答）

「ボランティア活動の情報」

64.8%、「ボランティア活動を手伝ってくれる外部の人」52.4%が上位 2 位の回答です。

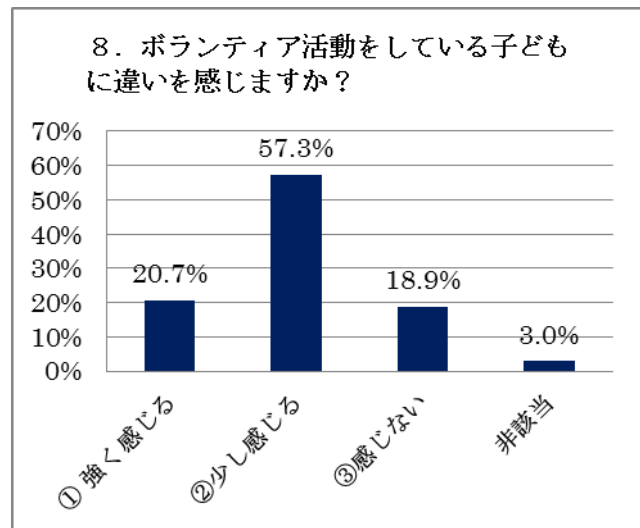
ついで、「ボランティア活動の励みになるツール」「指導についての研修会」「ボランティア活動指導の手引き」について、3割台の先生が必要と答えています。



8. ボランティア活動をしている児童、生徒と、していない児童、生徒では違いを感じますか？  
(1つ選んで下さい)

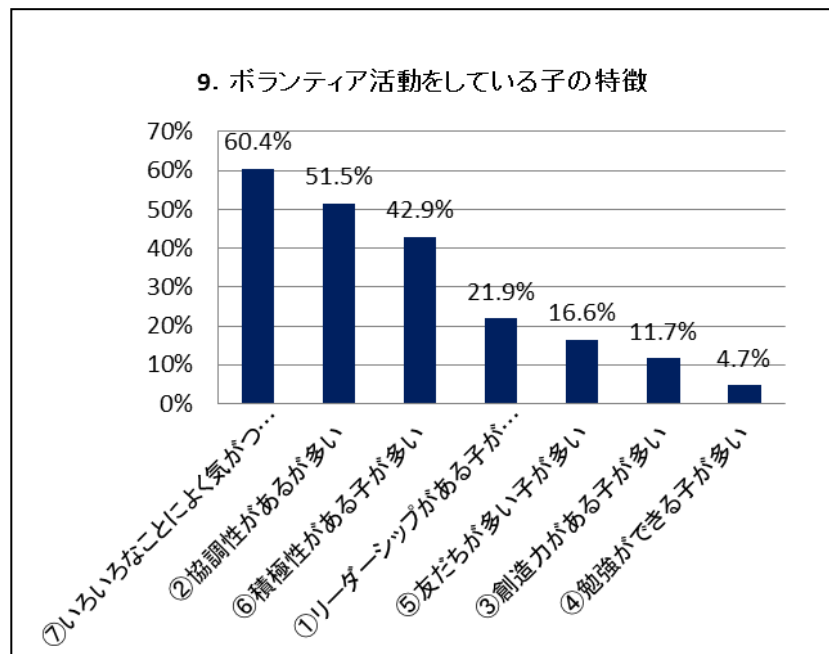
20.7%の先生が「強く感じる」、57.3%の先生が「少し感じる」、合わせると78.1%の先生が、ボランティア活動をしている子どもに違いを感じています。

「感じない」と回答した先生は18.9%です。



9. ボランティア活動をしている児童、生徒について、以下のことを感じますか？ (複数回答)

「いろいろなことによく気がつく子が多い」60.4%、「協調性がある子が多い」51.5%、「積極性がある子が多い」42.9%の3項目が回答の上位でした。

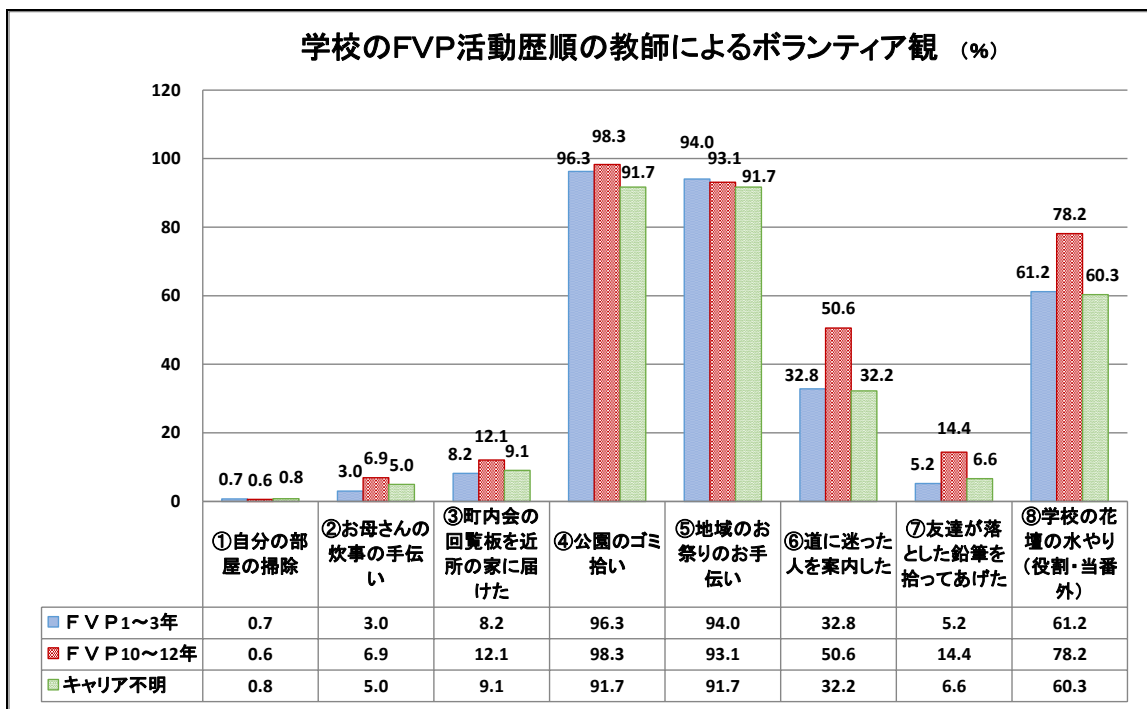




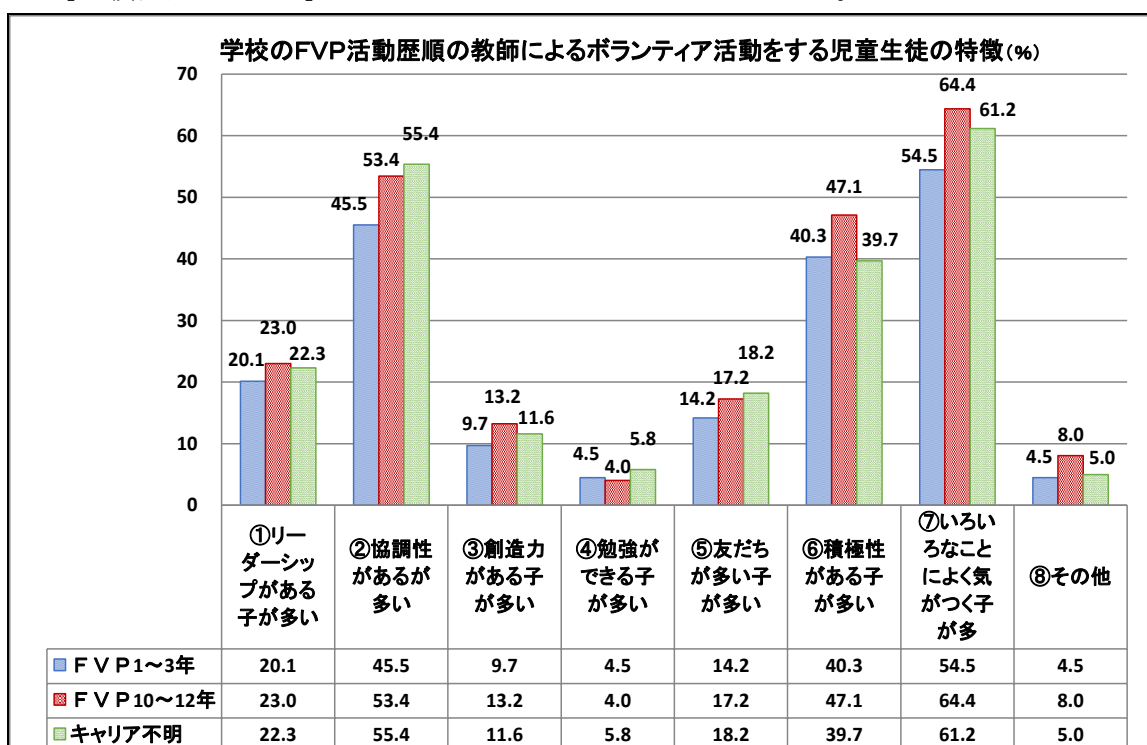
## 2. 調査からの教訓

ボランティア活動にかかわっている教員の中でも、FVP 経験の長さによって、子どものボランティアのとらえ方に変化が現れているところに注目したい。

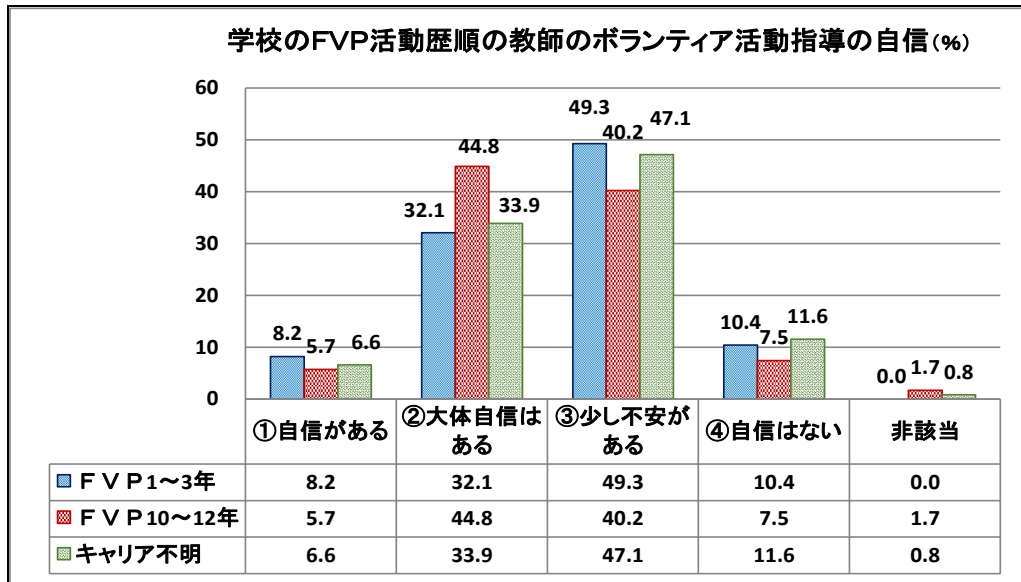
次の図表から読み取れるように、「公園のゴミ拾い」など、よく知られたボランティア活動においては、経験の長さによる違いは大きくないが、「道に迷った人を案内した」「友達が落とした鉛筆を拾ってあげた」「学校の花壇の水やり(役割・当番外)」などの、＜自発性によって生まれる取り組み＞にボランティア精神を読み取っている点に大きな違いが現れている。



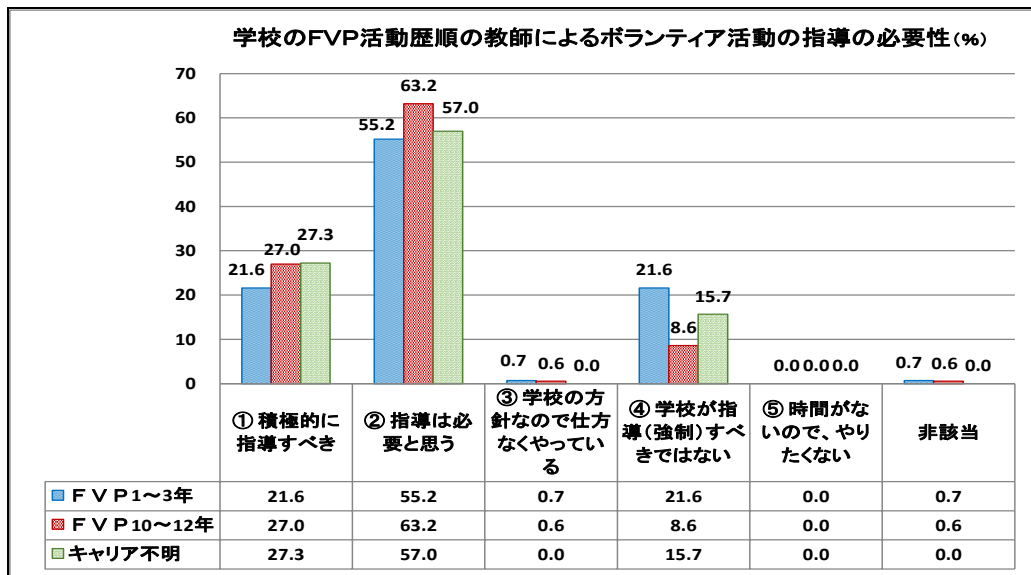
また、「形としてのボランティア」だけでなく「ボランティア精神」(他者の役に立つことに気づき、積極的に取り組む)に目を向ける視点は、同時に、下記の図表の子ども評価の視点にも連動し、「よく気が付く子」「積極性がある子」へと目配りが広がっていることがわかる。



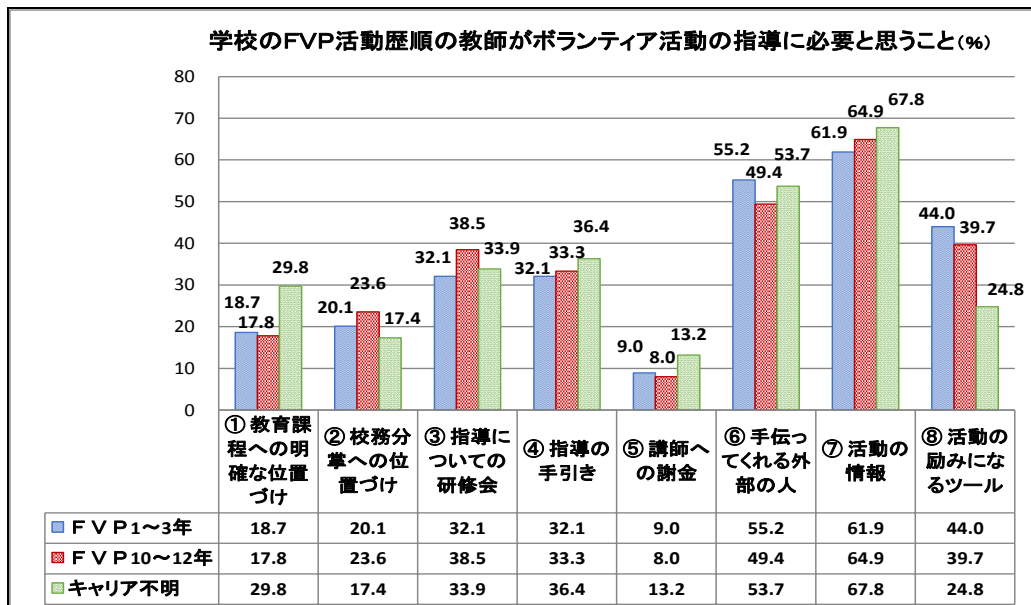
また、FVP経験が長いほど、ボランティア活動を指導する「自信」が高くなり、



同時に、子どもに対する「指導」の必要性を感じていることが読み取れる。



さらに、次の図表からは、「指導」についての研修の必要性を認識するようになっていくことがわかる。





ボランティア活動を長く続けることにより、形としてのボランティア活動だけでなく、ボランティア活動に取り組む内面的な精神・自発性に目が向くようになっていく。さらにそのことにより、日常の活動における子どもの心を理解し、子どもの見方・とらえ方に幅と深みが生み出される可能性がある。

昨年度の「子どものボランティア活動活性化のための研究会」まとめでは、「ボランティア活動」に参加した子どもの作文を分析した。その結果、参加活動を外面的にとらえるのではなく、内面における＜自発性＞に注目し、子ども自身の＜気づき＞を大切にすることの重要性が指摘されている。

「子ども自身の＜気づき＞を大切にする」という点に関して、教員自身の子どものボランティアを見る目・とらえる目の深化・発展をどう保障していくか、研修のあり方が問われている。

したがって、学校ぐるみでFVPなどのアイデアを活かしたツールを工夫・活用した取り組みを継続的に行うことや、さらにボランティア活動の指導に関する教員の研修や実践交流の機会を増やし、教員自身の意欲と意識を高めることが重要であると思われる。

以上